



TITLE:

『薔薇の奇蹟』におけるハイアラキーの諸条件

AUTHOR(S):

荒木, 敦

CITATION:

荒木, 敦. 『薔薇の奇蹟』におけるハイアラキーの諸条件. 仏文研究
1992, 23: 181-195

ISSUE DATE:

1992-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137785>

RIGHT:

『薔薇の奇蹟』におけるハイアラーキーの諸条件

荒 木 敦

私はあらゆる体系家を信用しない。そして彼らを避ける。体系への意志は誠実の欠如である。

——ニーチェ¹⁾

はじめに

『薔薇の奇蹟』 *Miracle de la Rose* は、末尾に《La Santé. Prison des Tourelles, 1943.²⁾》という記述があるが、1946年3月、マルク・バルブザによって、ジュネの二作目の小説として出版された。

ここで作品の「語り手」は、「私」すなわち「ジャン・ジュネ」であるとされている。当然ながら、この「ジャン・ジュネ」は「作家自身」とは区別されなければならない、小論では以下「ジュネ」と表記する³⁾。小説はフォントヴロー中央刑務所から始まるが、そこで「ジュネ」は、かつて収容されていたメトレ感化院の仲間たちに再会する。そのため小説中には、メトレへの回想が大量に挿入されて、実質的には感化院が同等なもう一つの舞台となってゆく。

登場人物は数が多く、その関係はしばしば複雑なのだが、「ジュネ」以外の主要な人物は、アルカモヌ、ディヴェール、ボチャコ、ロッキー、ビュルカン、ヴィルロワ、などである。このうちボチャコ、ロッキー、ビュルカンはフォントヴローで、ヴィルロワはメトレで、「ジュネ」、アルカモヌ、ディヴェールは両方の舞台において語られる。(ただしビュルカンも、かつてメトレの院生だった。)

小論では、『薔薇の奇蹟』あるいはジュネの小説一般における権力関係を読み解くために、その準備段階として、とりあえずいくつかの二元論的対立概念を用い、今後のより精密でより文化＝社会的な分析のための、基本的な見取り図の提出を試みることにしたい。

I. 女性の排除とロマンティック・ラブ

先に掲げた登場人物は全て男性であり、小説には尼僧と、アルカモーンに殺された少女以外、女性はほぼ登場しない。前作『花のノートルダム』*Notre-Dame-des-Fleurs*⁴⁾以上に、『薔薇の奇蹟』は男性中心的であり、その意味で閉鎖性が強い作品であるように思われる。だが一体、その閉鎖性はどのように構成されているのか、もう少し具体的に見てゆく必要があるだろう。

まず作品の舞台に関して、すぐに目につく特徴がある。囚人たちは有罪の判決を受け、看守に見張られており、そのうえ刑務所は塙に囲まれている。フロントヴローは、外界から切り離されて、閉じられた一種の小宇宙を形作っているように思われる。そしてまたこうした隔絶性は、刑務所のような確固とした壁を持たないメトレにおいても、やはり同様に認めることができるのである。

Se peut-il que le monde ait ignoré l'existence, ne l'ait même pas soupçonnée, de trois cents enfants organisés dans un rythme d'amours et de haines à l'endroit le plus beau de la plus belle Touraine? La Colonie menait là, parmi les fleurs[...], sa vie secrète, obligeant, jusqu'à vingt kilomètres alentour, les paysans à demeurer dans l'inquiétude, dans la crainte qu'un colon de seize ans ne s'évadât et ne mît le feu à sa ferme. Au surplus, chaque paysan touchant une prime de cinquante francs par colon évadé qu'il ramenait, c'est une véritable chasse à l'enfant, avec fourches, fusils et chiens, qui se livrait jour et nuit dans la campagne de Mettray⁵⁾.

メトレはある種の自律性（《organisés dans un rythme d'amours et de haines》）を備えているが、それは感化院が社会とは異質である（《sa vie secrète》）ことの代償として得られたものに他ならない。そして、単にメトレはそこに異質なものとしてあるだけではなく、少年たちと周辺の農民との間には明白な恐れ（《l'inquiétude》, 《la crainte》）や敵意（《fourches, fusils et chiens》）が介在しているのである。

つまりここでは、一般社会／感化院（および刑務所）という分割が導入されている。そしてこの二項対立は、なによりもまず、ロマンティックな愛のための装置として機能しているのである。ロマンティック・ラブに関しては、残念ながら小論では極めて一般的な議論しかできないが⁶⁾、その第一の特徴としては、恋愛の相手の唯一性とともに、障害とそれに抗して（比例して）燃え上がる情熱という図式を挙げることができるだろう。恋愛を成立させる障害は、家族間の対立、血

縁関係(近親相姦)、物質中心ブルジョワ社会の圧力など、場合に応じて様々な形を取る。ここでは、少年たちは敵意をもった社会から、一種の迫害を受けている (*une véritable chasse à l'enfant*)。そしてまた農民や看守の存在は、単に院生らを社会から分離するだけでなく、彼らの行動に規制を加え、彼らの間での恋愛の成就是をはなはだ困難なものにする。一般から見れば同性愛が既に有罪性を帯びているうえに、物質的にも貧しく、文通や会話は密に行われなければならない、恋人同志が長時間ふたりきりでいることもかなわない。しかしながら、登場人物の意識はどうであれ、客観的に見れば、そうした障害こそがこの種のロマンティックな恋愛を成立させ、その関係に強度を付与しているのである。

ただしここでは、他の多くのロマンティックな恋愛を主題とする作品とは異なった面も見られるだろう。実は通常の恋愛の場合、障害は上に例を挙げたような外的なものだけではない。もう一つの重要な条件は、男女という性が徹底的に異なったものとして認識されるということである。男性は強く行動的であり、女性はいく弱く受動的であって、その差異が心理上の距離として、つまり恋愛の条件として内的に要請されるのである⁷⁾。この距離は逆説的に二人を結び付けるが、その場合、恋人同志と敵対的状況との対立だけが特に強調されかねない。一方、その結果として、男女の間に存在する権力関係は、二義的なものとしてしばしば隠蔽されることになる。あるいはまた、恋人である男性は内面の *féminité* を、女性はいくれた *masculinité* を、互いに相手に投影しあうが⁸⁾、それが文化=社会的に極めて自然に行われるので、その事実には気づき、投影の機制を明らかにすることには、多くの場合相当な困難が伴う⁹⁾。しかし『薔薇の奇蹟』では、愛し合うのが男女ではないため、投影は簡単に軌轢を生み出す。また、社会の敵意にさらされているのは二人だけではないために、恋人同志の関係はそこで閉じてしまうのではなく、可能性としては複数に対して開かれている。この小説では、登場人物が社会から切り離され、しかも男性ばかりであることによって、権力関係の問題が、個々人の多様性を通じて明確化されていると言えるだろう。

さて女性の排除は、権力関係の複雑さを浮き上がらせ、その「反自然性」を顕在化させる装置として機能している。しかしより正確に言えば、一体何が排除され、隠され、あるいは忌避されているのか？ それを明らかにするためには、まずメトレに与えられている特徴、その性的役割に注目しなければならない。

Il m'arrive de parler de la Colonie en disant : *«La vieille»*, puis *«la sévère»*. Ces deux expressions n'eussent sans doute pas suffi à me la faire confondre avec une femme mais, outre que déjà elles qualifient habituellement les mères, elles me vinrent, à propos de la Colonie, alors que j'étais las de ma solitude d'enfant perdu et que mon âme appelait une mère. Et tout ce qui n'est qu'aux femmes : tendresse, relents un peu nauséabonds de la bouche entr'ouverte, sein profond que la houle soulève, corrections inattendues, enfin

tout ce qui fait que la mère est la mère [...]. [...] Je chargeai la Colonie de tous ces ridicules et troublants attributs du sexe, jusqu'à ce que, dans mon esprit, elle se présentât non sous l'image physique d'une femme, mais qu'entre elle et moi s'établît une union d'âme à âme qui n'existe qu'entre mère et fils, [...]. [...] En cellule, je retrouvai pour de bon son sein qui palpitait et, avec elle, j'engageai de vrais dialogues et peut-être ces avatars, qui faisaient de Mettray ma mère, aggravèrent-ils du sentiments d'inceste l'amour que je portais à Divers, sorti du même sein que moi¹⁰).

メトレは明らかに擬人化され、しかも《attributs du sexe》を与えられている。感化院は女性である。しかしここで、《femme》が《mère》へと横滑りしてゆく文章の流れには注意する必要があるだろう。一般的に言って、féminitéはmaternitéに必ずしも還元できない（例えば通常、性的に快楽を得る女性は、féminitéの言葉では語り得ても、maternitéの言葉では語り得ないものとされる）。ところがメトレにおいては、《femme》はいつのまにか《mère》へ、maternitéへと置き換えられ、《l'image physique d'une femme》はやがて抹消される。残るのは《physique》ならぬ《d'âme à âme》の母子関係である。つまり排除されているのは、肉体を備えた恋愛の対象としての女性だろう。そして結局のところ、母が提供する maternité の場こそが、男性たちを包み、メトレに見られる性的多様性を裏から支えていると考えられるのである。

II. 男性間の優劣と「ジュネ」の「男性化」

しかしそれでは具体的に、男性間の性的多様性とはどういうものなのか？ メトレやフォントヴローを、性的なものを伴うある種の階層秩序が支配しているのは、明らかであるように思われる。男性たちはいくつかのグループに分けられるだろう。メトレで権力を握っているのは、強く、悪意に満ちた《marle》である。各《marle》は自らの稚児《vautour》を所有しており、更にその下には、《cloche》または《clodo》と呼ばれる、同性愛で受身を務める「賤民」が存在する。フォントヴローでは《mac》が上位を占め、《casseur》が次に位置して、共に《dur》と呼ばれる。ここにもやはり、《lope》や《pédé》と呼ばれて、同性愛で受身を務める者たちがいる。

「花のノートルダム」でも見られたことだが、ここで評価の基準となり、賞揚されるものは、男性的特質である。例えば、《casseur》（《dur》）のポチャコは、次のように描かれている。

Sur sa face camuse, comme celle du boxeur, dure, ferme, martelée, frappée à coups redoublés, battue comme le fer forgé, je voyais, [...] toute la puissance d'un corps solide,

trapu mais inébranlable. Aucune mollesse ne faisait tomber la chair, la peau collait au muscle sec et à l'os¹¹⁾.

〈dure〉, 〈ferme〉, 〈fer〉, 〈puissance〉, 〈solide〉, 〈inébranlable〉, 〈aucune mollesse〉, 〈muscle sec〉といった語彙は、男性の「雄々しさ」virilitéを記述し、賛美するためのクリシェであると言えるだろう。

対して、〈cloche〉の惨めさは以下の通りである。

Comme ils parlent aux femmes qu'ils soumettent, les appellent tordues, pouffiasses, les durs parlaient méchamment aux enfants de l'odeur de leurs pieds blessés, de leur cul mal lavé¹²⁾.

ここには明らかに優劣関係があり、しかもそれは、性的なものと結び付けられている。〈cloche〉は単なる弱者なのではない。同性愛で受身を務めることによって、服従させられるべき féminité (〈femmes qu'ils soumettent〉) と見做され、劣位の位置で軽蔑されているのである。ここで貶められているのは、同性愛の全体ではない。もちろん、ある文化や社会において、そうした評価はあり得る。しかし少なくとも、小説中の刑務所や感化院では、〈dur〉が同性愛の行為そのものに関して、倒錯を非難されたりすることはない。軽蔑されるのは、そこで女性的役割を務めることである。これは何故か。

男女の性差 (virilité/féminité) は、あらゆる社会において、その構造のされ方こそ違い——もちろんこの違いは非常に重要である¹³⁾——、文化的認識体系の基礎を成す二元論的対立であると言えるだろう。そして殆どの社会で féminité は、対立の劣位項とされる。ある人物が、異性が排除された環境で同性愛を経験するにしても、彼または彼女もそうした体系の中で成長し認識してきた以上、性的な二元論から完全に逃れ得ているとは考えられない。したがって、小説内の男性たちにとっても、「女々しい」行為は軽蔑すべきことであると見做される。そしてまたこのことは、見方を変えれば、メトレやフォントヴローから締め出された女性が、男性内部の féminité という形で、閉じた世界の中に回帰を果たしているものと、考えることもできるだろう¹⁴⁾。

さて「ジュネ」はメトレで、ヴィルロワの、次いでヴァン・ロワの、そして最後にディヴェールの、〈vautour〉だった。彼は〈marle〉たちの〈petite femme〉であり、ディヴェールとは「結婚式」さえ挙げている。つまり「ジュネ」は féminité の側に属していた訳だが、その当時の様子は次のように語られている。

Durant ces années de mollesse, que ma personnalité prenait toutes sortes de formes,

n'importe quel mâle pouvait de ses parois serrer mes flancs, me contenir. Ma substance morale (et physique qui en est la forme visible avec ma peau blanche, mes os faibles, mes muscles mous, la lenteur de mes gestes et leur indécision) était sans netteté, sans contour¹⁵).

《mollesse》, 《faibles》, 《mous》, 《indécision》などといった表現は, 《dur》の属性とは正反対の劣った性格を表す。virilité/féminitéの対立を軸にした世界では, こうした生活は悲惨なものであり, 「ジュネ」は virilité を目指して, そこから脱出しようとする。しかしその過程を追う前に, メトレでの《vautour》の特別な位置を指摘しておく必要があるだろう。

《vautour》は, 《marle》に対しては女性的であり, 劣位の位置を占める。しかし, 全く軽蔑された存在であるとは限らない。

Si les durs choisissaient leurs favoris parmi les plus beaux jeunots, tous n'étaient pas destinés à rester femmes. Ils s'éveillaient à la virilité et les hommes leur faisaient une place à côté d'eux. [...] Les séduisants vautours étaient accueillis, et sur un pied presque d'égalité, si bien qu'à les voir familiers avec les durs, on ne pensait plus qu'ils puissent se faire enfler, alors qu'au contraire ils étaient les plus transpercés. Mais, forts de leur grâce, ils portaient si haut leur état d'enculés que cet état leur devenait parure et force¹⁶).

ここで, 《dur》(=marle)と《vautour》とは, 《presque d'égalité》の関係にある。《vautour》の全てが, 《femmes》にとどまる運命にある訳ではない。彼らが自らの virilité に目覚めることもある。したがって, 《vautour》は男性的かつ女性的であり, また軽蔑されるが同時に特権的な存在でもある。こうした性格は, 次の引用でよりはっきり示されているだろう。

Villeroy voulait que mon éducation fût virile. Il semble donc que, tout jeune, j'ai refusé dans mes rêves d'être sur la galère une belle captive, mais un mousse afin de me réserver la possibilité de *grandir* aux côtés du capitaine, et de prendre sa place. [...] Il décida donc que j'aurais un vautour. [...] Villeroy voulait que je 《case》 le petit mec sous ses yeux¹⁷).

《marle》と《vautour》は virilité/féminité の関係にあるのだが, ここではその関係が, 「ジュネ」と「ジュネ」の《vautour》との間において見られる。これは《marle》と《cloche》に挟ま

れた、《vautour》の特別な位置づけによるものと考えられるだろう。つまり二項対立は、異なった二つの組合せ(marle/vautourとvautour/cloche)に関して、表現され得るのである。また「ジュネ」は《un mousse》(男性)であって、《une belle captive》(女性)ではない。彼には「成長する」(《grandir》)可能性が与えられている。ヴィルロワに導かれ、自分の《vautour》を持つことによって、将来は彼も《viril(e)》な男に成れるかもしれない。あたかも息子が、先行者である父親を追い駆け、父親に迫り着き、やがては自分も立派な父親に成るように。

したがって、劣位の位置は絶対的なものではなく、ここには救いの可能性が与えられていることになる。「ジュネ」はメトレを出た後、惨めな境遇からの脱出を、さらなる「男性化」を目指すのである。

Tous les cambrioleurs comprendront la dignité dont je fus paré quand je tins dans la main la pince-monseigneur, la 《plume》. De son poids, de sa matière, de son calibre, enfin de sa fonction, émanait une autorité qui me fit homme. J'avais, depuis toujours, besoin de cette verge d'acier pour me libérer complètement de mes bourbeuses dispositions, de mes humbles attitudes et pour atteindre à la claire simplicité de la virilité¹⁹.

Je serai marle entre les marles et l'on ne saurait plus que je n'étais qu'un vautour¹⁹.

「ジュネ」にとって鉄槌はファルス(《verge d'acier》)であり、《virilité》そのものに他ならない。それがここでは、これ以上ないほど明白に語られている。彼は鉄槌の《autorité》によって、《homme》に成る。もはや誰も、「ジュネ」が《vautour》にすぎなかったことに気付かないだろう。彼は《casseur》の仲間入りを果し、かつての自分の《marle》、ディヴェールと対等の存在に成る。それだけではない。遂に彼は、フォントヴローで、ディヴェールを征服することにも成功するのである。

Mais le soir, Divers s'arrangea pour être enfermé dans ma cellule. [...] Quand il fut couché, ses muscles s'étant relâchés, ce que je couvris de baisers ne fut plus qu'une vieille dame fatiguée. Et je ne compris jamais que le baiser est la forme du primitif désir de mordre, et même de dévorer, autant que ce soir où je connus la lâcheté de Divers devant son crime qui, en pâissant son visage, le fit rentrer dans sa fragile coquille. [...] Je connus la volupté de le dominer, enfin! J'étais le plus fort moralement, mais physiquement aussi, car la peur et la honte amollissaient ses muscles²⁰.

ディヴェールに関係する、〈vieille dame fatiguée〉、〈fragile〉、〈peur〉、〈honte〉、〈amollissaient〉、といった表現は、彼の「女性化」と劣位性を表している。一方「ジュネ」は、〈mordre〉、〈dévorer〉、〈dominer〉、〈fort〉、といった語彙から明らかなように、能動的・男性的であり、より「雄々しい」人物としてここでは描かれることになる。この場面は小説の末尾で語られており、時間的流れにおいても最後のほうに位置する。「ジュネ」とディヴェールとの権力関係は、こうして逆転するのである。したがって、読者は作品全体を通じて、性的二項対立に沿った、「ジュネ」の「男性化」の過程を読み取ることができると言えるだろう。

III. 性的ハイアラキーとその相対性

しかしながら、基本的な疑問が提出され得る。果たして末尾の描写に、作品の意味の全てを収束させてよいものだろうか？ 確かに二項対立は作品を構造化しており、「ジュネ」の「男性化」はモチーフの一つであるかもしれない。しかし小説においては、この「男性化」の完全性を疑わせるような記述も、やはり複数存在するのである。そうした記述を本質的でないものとして、単なる逸脱として処理する分析は、少なくともここで我々が目指している読み方ではあり得ない。

さて、〈vautour〉の劣位は相対的なものであり、そのことは彼にとって救いだった。しかし同時に、これは優位が相対的であることをも意味する。確かにディヴェールに対しては優位に立てたとしても、他のいずれかの男性に対して、「ジュネ」が常に完全に優位であるとは限らないだろう。こうした、ある任意の男性の virilité の相対性は、次の場面で、驚きと共に認識されているように見える。「ジュネ」の〈marle〉ヴィルロワが、ロベールに喜んでキスをされるのだが、以下はそれに対する語り手の反応である。

Mon homme, mon dur, mon mec, celui qui m'embrassait et me donnait son parfum, se faisait embrasser, caresser par un marle plus puissant. Un casseur l'avait embrassé! Les voleurs s'embrassaient donc²¹⁾!

〈Mon homme, mon dur, mon mec〉は、確かに「ジュネ」より男らしい。しかし、そのヴィルロワに対しても、ロベールというさらに〈plus puissant〉な男が存在するのである。ある男性二人の組み合わせには、virilité/féminitéの優劣関係が見られる。しかし当然、より「雄々しい」、そしてまたより「女々しい」、他の男たちは見出し得るだろう。二項対立の繰り返しからなる、こうした性的ハイアラキーの連続性は、次の描写においてより明瞭に示されている。

Le baiser à Villeroy, et le baiser de ce casseur firent tout, car je fus encore terrassé par cette idée que chaque mâle avait un mâle plus fort, que le monde de la virilité et de la force s'aimait ainsi, de maillon en maillon, formant une guirlande de fleurs musclées et tordues, ou rigides, épineuses. Je devinai un monde étonnant. Ces marlous n'en finissaient pas d'être femmes pour un autre plus fort et plus beau. Ils étaient femmes de moins en moins en s'éloignant de moi, jusqu'au marlou très pur, les dominant tous, celui qui trônait sur sa galère, dont la verge si belle, grave et lointaine, sous forme de maçon, parcourait la Colonie. J'étais à l'autre bout de cette guirlande, et c'est le poids de la virilité du monde que je supportais sur mes reins tendus quand Villeroy m'emmanchait²²⁾.

ある男性にはより強い別の男性が存在し、前者は後者にとっての《femme(s)》である。優劣関係は連続し、男性はその virilité/féminité の度合いにしたがって、この《guirlande de fleurs》の何処かへ、相対的に位置づけられることになる。

しかしところで、この連鎖における、絶対的に「雄々しい」男性とはどういう人物なのだろうか？ メトレとフォントヴローで最も「雄々しい」と考えられるのは、上の引用で《maçon》と呼ばれているアルカモーヌである。確かに『花のノートルダム』や『死刑囚監視』 *Haute Surveillance*²³⁾においても、やはり彼のような殺人犯は virilité の象徴と見做されている。しかしアルカモーヌもまた、結局ハイラーキーの頂点に立つことはできない。《marlou très pur》は別人であって、次のように描かれている。

Si j'ai rêvé d'une queue, ce fut toujours de celle d'Harcamone, invisible à la Colonie, [...]. Or, cette queue, je l'appris plus tard [...], elle n'existait pas. La queue se confondait avec Harcamone, ne souriant jamais il était lui-même la verge sévère d'un mâle, d'une force et d'une beauté surnaturelles. La vérité, c'est qu'Harcamone appartenait à un prince-forban qui avait entendu parler de nous. De sa galère, entre ses gueux cuivrés, c'est-à-dire aussi, couverts d'ornements de cuivre, voguant et bandant loin d'ici, il nous avait envoyé sa bite admirable, aussi mal dissimulée sous les traits d'un jeune maçon [...]

24)

小説を通じて、確かにアルカモーヌは一種の中心なのだが、ここでの彼は、より優位なある他者に従属しているらしく思われる。しかしこの他者、ハイラーキーの頂点は、本当に存在しているのだろうか？ 他者とは《prince-forban》であり、彼が己のファルスを、遙か奴隷船の上から感化院へと、アルカモーヌの姿に変えて送り込んでいるのである。しかしこうした説明・描写

は、小説の他の大部分に対して、明らかに異なったりアリティーのレベルに位置しているように感じられる。《prince-forban》は、「ジュネ」やディヴェールの日常行動と同じ程度に、現実的な人物であるとは考えられないだろう。

感化院や刑務所といった閉じた世界は、性的な権力関係を浮かび上がらせる場として機能している。しかし、この条件によって明らかになった virilité の連続を追って行くと、最終的に、そうした閉じた世界の外部を持ち出さざるを得なくなる。頂点に位置する者は、《surnaturel(les)》な人物でしかあり得ない。要するに、純粋な virilité, ハイアラキーの頂点は、寓話的に語られはしても、結局は不在なのである。

優劣関係は確かに機能している。しかし個人の位置は相対的なものであるし、体系を吊り支える頂点も、実は空想的な形でしか存在しない。結果として、個人の virilité/féminité は、部分的・一時的なものとならざるを得ないだろう。この点はビュルカンにおいて、そして「ジュネ」とビュルカンとの関係において、特に明らかであるように思われる。

ビュルカンは容易に屈服し、軽蔑される《tante》ではない。彼は「ジュネ」と同じ《casseur》であり、男らしい存在として、次の引用では描かれている。

S'il ne se fût agi que d'une tante, j'aurais su tout de suite quel personnage me composer : je l'eusse fait 《à la brutale》, mais Pierrot [=Bulkaen] était un casseur preste, un gamin peut-être profondément désolé — et lâche comme le sont les mâles. A ma brutalité, il eût peut-être opposé la sienne, alors qu'il pouvait encore se laisser prendre au piège d'une tendresse inhabituelle. Sa méchanceté, ses roueries, ses retours violents, sa droiture, c'étaient ses angles²⁵⁾.

《méchanceté》, 《roueries》, 《retours violents》, 《droiture》, といった表現は、《casseur》の属性を表している。しかし、こうした男らしい特徴に反するような描写も、ビュルカンに関しては同様に存在する。

Bulkaen fut une cloche à Mettray. Il est important qu'on s'en souviennne, et je dois l'aimer, puisque je l'aime, à cause de cela, afin de ne laisser aucune prise au mépris, non plus qu'au dégoût²⁶⁾.

Bulkaen était la honte même²⁷⁾.

ここでのビュルカンは、《cloche》で《honte》そのものであるとされ、その「女々しい」劣位の

性格は明らかである。二種類のビュルカンの、いずれが本物なのだろうか？ 答えはしかし、そう簡単には決定できないと思われる。次の引用では、単純な二者択一を離れて、「ジュネ」の欲望が果す役割を考えることが必要とされるだろう。

Attiré vers les hommes (ceux qui disent : 《Nous, les hommes, vous, les caves》) Bulkaen, se plaît à leurs façons. J'ai attendu chez lui les signes d'une évidente féminité grâce à quoi je l'eusse entièrement dominé. A la dérobee, je regardais son mouchoir, espérant bêtement le découvrir taché de sang par une hémorragie nasale, et mensuelle, dont sont atteints, dit-on, certains invertis. Ce sont leurs périodes. Or, plus je l'examinais, ce gosse, plus je lui trouvais un air brutal et parfois menaçant malgré son sourire²⁸⁾.

「ジュネ」はビュルカンを愛し、かつ支配したいと望む。それ故、彼はビュルカンの中に従属性たる《féminité》を見い出すことを欲望し、馬鹿げたことに(《bêtement》)、男性であるビュルカンに月経のしるしを認めようと願ったりもする。ここでのビュルカンは、欲望する観察者の視線の中で、まさに欲望されることによって、決定困難な性質を示していると言えるだろう。結局のところ、何がビュルカンの真理なのか、という問いはあまり重要な意味を持たない。個人の virilité/féminité は、単独で確固として存在するものではなく、むしろ他者との、他者の欲望との関係において、一時的・部分的に発現するものなのである。

実際、ある程度の優位は得るものの、「男性化」した「ジュネ」がビュルカンを、決定的に服従させ得たとは考えにくい。

Je savais venu le moment où je devais soumettre Bulkaen. [...] Je le pressai un peu plus fort, puis brusquement, je fis le geste voyou de le pilier en mettant une main sur son ventre et l'autre sur sa nuque, violemment. [...] Je le sentis vaincu. J'entendis sa respiration suffoquée, je soufflai moi-même un peu; quand je l'eus lâché, nous étions honteux l'un et l'autre. Je dis, les dents serrées, l'air toujours mauvais :

— J't'ai eu quand même.

— Malgré moi. T'as même rien eu du tout, j'avais mon froc.

— C'est la même chose, j'ai joui. Et puis je t'aurai quand j'voudrai.

[...] J'étais le maître.

Il n'était plus à présent que le même qu'il fut à Mettray, celui qu'il n'avait cessé d'être, je le voyais bien²⁹⁾.

「ジュネ」は確かに、ビュルカンを打ち負かし (《vaincu》), 屈服させる (《soumettre》)。ビュルカンはかつてのような《même》でしかなく、勝利した「ジュネ」は《maître》と成る。しかしながらこの勝利は、ビュルカンの意志に逆らった (《Malgré》) 点で不完全なものであり、それ故に二人は、《honteux l'un et l'autre》という感情を抱かざるを得ない。「ジュネ」は自らの男性的魅力によって、ビュルカンの愛を勝ち得た訳ではなく、この後もやはり、彼はそれを得ることができないだろう。そしてより決定的なことに、ビュルカンは、「ジュネ」ではなくポチャコを脱走のパートナーに選び、結局見つかって銃殺されるのである。もし「ジュネ」の勝利が完璧なものであったならば、こういうことは起こらないだろう。最終的に、「ジュネ」の男性化は十全なものではあり得ない。

結局、「ジュネ」にしろビュルカンにしろ、あるいは他のいずれかの人物にしろ、ハイアラキーでの絶対的な位置や、何か疑い得ない「本質」を所有している訳ではない。それゆえ個人は、一箇の統一された全体性ではなくして、むしろ関係のネットワークの中の一結節点なのであり、そしてまた、主体と他者との関係は、常に不安定性を抱え込んだものであるということになるだろう。メトレやフォントヴローにおいては、恋愛を成立させる障害は確かにロマンティックなものであるが、にもかかわらず唯一で永遠の恋人は存在しないのである。つまり、中心 (= 頂点) は一つではあり得ない。

La Colonie, dont Divers, tournait autour de cet axe : Harcamone. Mais elle, dont Harcamone, tournait autour de cet axe : Divers. Puis autour de Villeroy et de beaucoup d'autres. Son centre était partout³⁰).

しかしながら、唯一の中心の不在は、決して均質な無差異を意味する訳ではない。逆に、絶対的な中心が存在しない故に、アルカモーンであれ、ディヴェールであれ、他の人物であれ、誰もが中心であり得る。そこでは複数の中心が機能し、一時的・部分的な関係が生じ、種々の差異がいたる所で産出されているのである。

結論にかえて

さて、ここまで我々は以下のことを見てきた。小説の舞台は、一般社会から隔絶しており、ロマンティック・ラブのための装置として機能している。そこから排除された女性の maternité はメトレという場として、féminité は男性間の性的意味づけを伴った劣位性として、作品内へ回帰

して来るだろう。男性は、virilité/feminitéの二項対立的優劣関係に沿って秩序づけられているが、「ジュネ」はこの中で、「男性化」を目指して一応の成果を得る。しかし、二項対立の連続から成るハイアラキーの頂点は、結局体系内には実在しないし、「ジュネ」の「男性化」も不完全なものに終る。絶対的根拠としての中心は存在しない。したがって、欲望が織り成す各人の関係は常に揺れ動き、個人は独立した monolithique な全体性ではあり得ないことになる。

無論この読解は、ハイアラキーが完全な虚妄であるとか、抑圧を伴った権力関係が全く存在しないとかいった、単純な主張と同義なのではない。複数の差異とハイアラキーとの間の絶えざる抗争が、常に問題となるのであり、そしてさらには、差異の産出の側に立った戦略が、無根拠であっても、あるいは無根拠であるが故に、なおもしばしば必要とされるだろう。最後の引用を見ることにしたい。

Or, le gosse le plus audacieux, celui qui osa la plus folle parure, ce fut Métayer.

[...] Il raconta aux plus attentifs et surtout à moi, qu'il était le descendant direct des rois de France. Le chapelet des généalogies s'égrenait entre ses lèvres très étroites. Il prétendait au trône. [...] Il se voulait héritier des rois de France. Il ne faudra pas confondre la mégalomanie de Métayer avec mon goût profond de l'imposture qui me faisait rêver m'introduisant dans une famille puissante. Remarquons que Métayer se croyait fils ou petit-fils de roi. Il se voulait roi pour rétablir un ordre détruit. Il était roi. Je ne désirais que commettre un sacrilège, souiller la pureté d'une famille comme je souillerais la caste des marles en y faisant admettre le vautour que j'étais³¹⁾.

メテイエは主要な登場人物ではないが、今までの議論を踏まえた視点からすると、ここで語られていることは重要な意味を持つだろう。メテイエの《mégalomanie》は、自分の現実の地位を認識しない点では異常であっても、王の威信や価値を信じ、ハイアラキー（《caste》）の無謬性を盲信している点では、既存の体系と齟齬をきたすものではない。《généalogies》、《trône》、《héritier》といった言葉は、むしろ偏執狂的に、体系の拘束力に加担する志向性を表現している。彼は破壊された秩序を再建（《rétablir un ordre détruit》）したがつているのである。一方「ジュネ」の《imposture》は、これと区別されなければならない。「ジュネ」は、ハイアラキーを信じているのではないが、とりあえずそれを利用しながら、その裏をかき、還元できない差異を内部に持ち込んで、体系内のズレを拡大させてゆくのである。このとき、差異の産出と、可能な関係性の数は増大することになるだろう。

一般的に言って、ある強制力を持った物語を完全に否定し得た、体系の絶対的な外部に超出し得たと思った瞬間、人は錯覚に捕われているのである。それは外部／内部というもう一つのより

大きなシステムに再び落ち込んだだけのことであり、批判の対象であった体系は、この新しい二元論のおかげで無事息災に保たれることになる。したがって、少なくともある具体的な場面においては、「ジュネ」のような戦略がより大きな有効性を持ち得るだろう。

もちろんこれは、同時に、ジュネ自身の意識的戦略でもあるかもしれない。しかし作品と実人生の全てを、意識のドラマに仕立て上げる必要はないだろう。そうした解釈は、体系を重視することによって、テキストに現れた部分としての有効性を、殊更に狭く限定してしまうおそれがある。むしろ、作者の意図とも無関係に、作品内の様々な錯綜や矛盾や逸脱を——今回ふれられなかったシニフィアンの問題も含めて——、権力関係と渡り合う可能性のヒントとして救出すること、それが現在より有効なジュネの読み方であるように思われてならない。

註

- 1) ニーチェ、『偶像の薄明』、秋山英夫訳、角川書店、1951、P. 74.
- 2) Jean Genet, *Miracle de la Rose*, Décines, L'Arbalète, 1946, p. 223. テキストの引用は以下全てこの版に拠る。これに先立って作品の一部は、1945年5月、『ラルバレート』誌に発表された。なおガリマル版全集 *Œuvres complètes II*, Gallimard, 1951, では、同性愛の肉体描写などが削除されている。
- 3) 語りの問題は興味深い研究テーマだが、小論では詳しく触れる余裕がない。この点に関しては、Camille Naish, *A Genetic Approach to the Structures in the Work of Jean Genet*, Massachusetts, Harvard U.P., 1978, pp. 89—112, 参照。
- 4) Jean Genet, *Notre-Dame-des-Fleurs*, Monte-Carlo, *«aux dépenses d'un amateur»* (Paul Morihien), 1943.
- 5) Jean Genet, *Miracle de la Rose*, p. 12. なお、現実のメトレ感化院と『薔薇の奇蹟』における描写との比較に関しては、Albert Dichy et Pascal Fouché, *Jean Genet. Essai de Chronologie 1910—1944*, Bibliothèque de Littérature française contemporaine, 1988, pp. 125—127, を参照。
- 6) この問題については、Denis de Rougemont, *L'Amour et l'Occident*, Plon, 1939, および、Kate Millett, *Sexual Politics*, New York, Doubleday, 1970, を参照。
- 7) この種の「物語」は、おそらく衰退しつつあるのだろうが、やはり依然として様々な場所で再生産され続けている。例えば、Ann Barr Snitow, *«Mass Market Romance»* (extract) in *Feminist Literary Theory*, edited by Mary Eagleton, Oxford, Basil Blackwell, 1986, pp. 134—140, における、ハーレクイン・ロマンスについての指摘を参照。
- 8) 「投射、投影」に関するフロイトの考え方については、Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la Psychanalyse*, P.U.F., 1967, pp. 343—350, にその要約・注解がある。同書によれば、フロイトは、投射の機制が病的な場合に限られない正常なものであることを、幾度か主張している。
- 9) ロマンティックな愛の隠れた抑圧的側面に関しては、Kate Millett, *op. cit.*, とともに、Xavière Gauthier, *Surréalisme et Sexualité*, Gallimard, 1971, を参照。なおここでゴーチエは、抑圧的側面の隠蔽に反対した例外的なシュルレアリストとして、ルネ・クルヴェルをあげて高く評価している。この指摘はおそらく正しいが、クルヴェルが同性愛者であったが故にそれが可能であったという主張

は、作品を作家の実人生から直接説明している点で、やや経験主義的に過ぎる憾みがあり、テキストの可能性を狭く限定する危険を抱えているように思われる。

- 10) Jean Genet, *Miracle de la Rose*, p. 150.
- 11) *Ibid.*, p. 17.
- 12) *Ibid.*, p. 186.
- 13) この点に関しては様々な議論がある。エドウィン・アードナー、シェリ・B・オートナー他、山崎カヲル監訳、『男が文化で、女は自然か?』、晶文社、1987を参照。
- 14) 「抑圧されたものの回帰」に関しては、Laplanche et Pontalis, *op. cit.*, pp. 424—425, 参照。
- 15) Jean Genet, *Miracle de la Rose*, p. 22.
- 16) *Ibid.*, p. 126.
- 17) *Ibid.*, p. 155. イタリックはジュネによる。
- 18) *Ibid.*, p. 22.
- 19) *Ibid.*, p. 97.
- 20) *Ibid.*, p. 222.
- 21) *Ibid.*, p. 169.
- 22) *Ibid.*, pp. 170—171.
- 23) Jean Genet, *Haute Surveillance*, Gallimard, 1949.
- 24) Jean Genet, *Miracle de la Rose*, pp. 134—135.
- 25) *Ibid.*, pp. 60—61.
- 26) *Ibid.*, p. 203.
- 27) *Ibid.*, p. 205.
- 28) *Ibid.*, p. 142.
- 29) *Ibid.*, pp. 165—167.
- 30) *Ibid.*, p. 128. イタリックはジュネによる。
- 31) *Ibid.*, pp. 174—175.